

複数部を成巻した隅寺心経

—海龍王寺本と根津美術館本—

宮崎 健 司

はじめに

正倉院文書は主に皇后宮職写経所にはじまる官宮写経所の事務帳簿群である。そこから奈良時代におこなわれた数多くの写経事業を知ることができる。その中に「年料多心経」と呼ばれた『般若心経』の写経事業があった。年料多心経は、天皇と皇后の一年間の平安を祈ることを目的に、当該年の年間総日数分を天皇分と皇后分の各一部『般若心経』を写させたもので、一紙に一部づつ写し、三十紙（三十部）を一巻に仕立てたものであった。かつて年料多心経を検討し、その書写状況を明らかにするとともに、その遺品が隅寺心経と呼ばれる古写経群であることを指摘した¹。その際、隅寺心経そのものについて十分に論究できなかったため、のち伝存する隅寺心経の調査をおこない、不十分ながら概要について述べた²。しかしながら、上述のごとく、年料多心経は複数部を成巻した状態が本来の形態であったにも関わらず、遺存する隅寺心経のほとんどは一紙（一部）を卷子ないし軸装に装丁したもので、その点から前稿では原装にもとづく十分な分析ができていたといえなかった。一方で本来の姿を留めると思われる複数部を成巻した遺品も少ないながら伝存する。管見の限りでは、海龍王寺藏隅寺心経（十部）・正智院藏隅寺心経（十部）・根津美術館藏隅寺心経（十四部）・龍門文

庫藏隅寺心経（二部）が知られる。今回、このうち海龍王寺藏隅寺心経（以下「海龍王寺本」と根津美術館藏隅寺心経³（以下「根津美術館本」）を調査する機会を得たので、その概要を報告するとともに、若干の考察を試みたいと思う。

一 海龍王寺本について

海龍王寺は、奈良時代に隅寺・隅院などと呼ばれ、その創建は白鳳時代にさかのぼる古刹である。隅寺心経の呼称の由来となった寺院である。伝承によれば、空海が大安寺にあった時、法華寺の東北隅にあった隅寺に通い、毎日百卷ずつ千巻を書写して堂の天井に籠め置いたとされている。江戸時代後期の儒学者松崎慊堂（二七七一～一八四四）の日記に「心経跋」が載せられ、それは「角寺心経」と呼ばれるもので、「南都海竜王寺」に蔵され、「廿一通為一卷」であった⁴とし、江戸時代後期には隅寺心経は広く知られるところであったらしい。

海龍王寺本は十部を成巻するもので、料紙は淡褐色ないしは黄褐色を呈している。紙高は二六・五糎、紙幅は四一・四糎、四三・七糎、本文の墨色が第一紙から第三紙と第四紙以降ではやや異なり、前者に比べ後者が少し薄い印象をもつ。

接続状況は、紙継ぎ目の天界や地界の食い違いを基準に判断すると、第一紙と第二紙、第三紙と第四紙がそれぞれ界線が通っていないと思われる。一方、第四紙から第十紙までは界線が通っているか、または紙継ぎ目を超えて界線が引かれた痕跡がある。例えば、第四紙と第五紙の紙継ぎ目では、界線を合わせたように同位置で界線が揃えられ、第五紙と第六紙の紙継ぎ目では、天界、地界ともに第五紙の最終行の半ばで一旦途切れ、そのやや上から第六紙にかけて、右から左に一気に引かれたことがわかる。したがって、第四紙から第十紙までの紙継ぎ目は原装であったといえる。なお、年料多心経の天平十八年料は一紙づつ書写したのちに装丁したことがわかるが、その場合、紙継ぎ目で天界、地界が食い違う可能性がある。第一紙と第二紙の紙継ぎ目の食い違いがその例に当たる可能性も否定できないが、第一紙左端の

天界を詳細に観察すると、わずかに二重になっているかに見える箇所があり、そうであれば、その痕跡は左に貼り継がれた料紙の天界のはじまりといえ、やはり第一紙と第二紙の紙継ぎ目は原装とはいえないであろう。

本経（底本）についてみるなら、経題については全十紙ともつとポピュラーな首題「心経」のみを記すものだが、第一紙から第三紙までは功德文Bをもつタイプで、第四紙以降は功德文をもたないタイプとなっており、両者で本経が異なっていたことを示す。また料紙の紙幅についてみると、第一紙から第三紙は四二・七糎、四三・七糎で四三・〇糎前後の料紙が使用されたと思われるのに対して、第四紙から第十紙は四一・四糎、四二・〇糎で、第四紙が四一・四糎、第十紙が四一・六糎で、他の五紙は四一・九糎ないしは四二・〇糎となっており、本来、四二・〇糎前後の料紙が使用されたと考えられる。したがって、それぞれ別の一群の遺品とすべきであろう。

ところで第二紙と第三紙の紙継ぎ目は原装ながら、第一紙と第二紙の紙継ぎ目は原装と考えられないのだが、用字、字配りも同じa群を示している。功德文についてはタイプは同じだが、一箇所だけ第一紙が「思」とするところを第二紙、第三紙は「恩」として用字の相違がみられる。この両者の相違を本経の相違とみるか判断の難しいところだが、筆跡をみると同筆のように感じられるので、書写者の誤写とみて、一連の遺品群と考えることにする。また第四紙から第十紙は原装と考えられるが、第三紙までと同様に用字が共通し、字配りも同じb群を示している。ただし詳細にみると字配りが七紙すべて共通しているわけではなく、第五紙のみがb2群で、他の六紙はb1群となっている。その相違は次の通りである。

b1群

b2群（第五紙）

- | | | |
|----|--------------------|--------------------|
| 08 | 死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無 | 死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無 |
| 09 | 所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無 | 無所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無 |
| 10 | 罽儼無罽儼故無有恐怖遠離一切顛倒夢想 | 罽儼無罽儼故無有恐怖遠離一切顛倒夢想 |

(中略) (中略)

14 能除一切苦眞實不虛故説般若波羅蜜^多 能除一切苦眞實不虛故説般若波羅蜜

15 呪即説呪曰 ^多呪即説呪曰

相違する文字を□で囲んで示したが、b1群八・九行目末の「無」と十四行目末の「多」がそれぞれb2群では次行に送られている。この相違をどの程度の相違とみるか、つまり本経の相違とみるかどうかはやはり難しいところであるが、比較的軽微なものであるともいえ、書写者の字配りの誤写あるいは一定度の裁量の範囲とみてとるのが妥当ではないかと考える。第四紙からは原装であることや、第五紙のみが相違することからすると、別の本経による書写とみる方が不自然であろう。さらに筆跡をみると同筆と感ぜられるので、そのように考えておきたい。つまり第四紙から第十紙についても、一連の遺品群と考えられよう。そこで第一紙から第三紙を海龍王寺本 α 群、第四紙から第十紙を海龍王寺本 β 群と呼ぶことにする。

海龍王寺本のあり方を上述のように理解した上で、以下、海龍王寺本の α 群と β 群の奈良時代にあり方について復原を試みたい(表1参照)。

まず α 群であるが、原装を示すのは第二紙と第三紙の紙継ぎ目であることから、その点に注目し、本来の姿を考えることにする。第二紙は冒頭に一行弱の空行があり、次いで首題一行、本文十六行、功德文三行が写され、末尾に二行の空行を有している。第三紙は冒頭の一行の空行ののち、第二紙同様に首題一行、本文十六行、功德文三行が写され、末尾に二行弱の空行を有している。第二紙右端および第三紙左端はのちに切断等の改変が加わっている可能性があるため、そのあり方は参考にとどまるが、第二紙と第三紙の紙継ぎ目は原装であるため、第二紙左端と第三紙右端は本来の姿を示しているといえる。それを基準にすると、 α 群の一紙の料紙は、冒頭に一行の空行をもち、次いで首題一行、本文十

表1 海龍王寺本

| 紙数 | 首題 | 字配り | 功德文 | 用字 | | | | | 空行 | | 法量 | | |
|------|----|-----|-----|----|---|---|---|---|-----|-----|------|------|----|
| | | | | 无 | 呪 | 薩 | 囉 | 恩 | 冒頭 | 末尾 | 紙高 | 紙幅 | |
| 第1紙 | 心經 | a5 | B | 无 | 呪 | 薩 | 囉 | 恩 | 0.8 | 1.8 | 26.5 | 42.7 | α群 |
| 第2紙 | 心經 | a5 | B | 无 | 呪 | 薩 | 囉 | 恩 | 0.5 | 2 | 26.5 | 43.0 | |
| 第3紙 | 心經 | a5 | B | 无 | 呪 | 薩 | 囉 | 恩 | 1 | 2 | 26.5 | 43.7 | |
| 第4紙 | 心經 | b1 | | 無 | 呪 | 莎 | 囉 | | 1.7 | 3 | 26.5 | 41.4 | β群 |
| 第5紙 | 心經 | b2 | | 無 | 呪 | 莎 | 囉 | | 2 | 3 | 26.5 | 42.0 | |
| 第6紙 | 心經 | b1 | | 無 | 呪 | 莎 | 囉 | | 2 | 3 | 26.5 | 42.0 | |
| 第7紙 | 心經 | b1 | | 無 | 呪 | 莎 | 囉 | | 2 | 3 | 26.5 | 42.0 | |
| 第8紙 | 心經 | b1 | | 無 | 呪 | 莎 | 囉 | | 2 | 3 | 26.5 | 41.9 | |
| 第9紙 | 心經 | b1 | | 無 | 呪 | 莎 | 囉 | | 2 | 3 | 26.5 | 41.9 | |
| 第10紙 | 心經 | b1 | | 無 | 呪 | 莎 | 囉 | | 3 | 1.8 | 26.5 | 41.6 | |

※紙数巻の点線は原装、実線はのちの紙継ぎ目を示す。

六行、功德文三行が写され、末尾に二行の空行をもつというのが原形であったと想定され、一紙の行数は二十三行であったといえる。第二紙右端で空行の幅が少し狭いのは、切断等によるのちの改変によるものと考えると、上述の料紙の想定基準に齟齬するものではない。さらに第一紙についても、冒頭に一行弱の空行があり、次いで首題一行、本文十六行、功德文三行が写され、末尾に二行の空行を有しているので、右端はのちの改変によるものと考えられ、左端は原形に近いことが想像される。したがって、第一紙についても料紙の想定基準におさまるものといえよう。

法量についてみると、紙高の現状が原形かどうかには判じがたいが、遺品の中で二六・五糎を示すものが比較的多いことから、ひとまず原形と考えることにしたい。紙幅については、第一紙から第三紙までの界幅が一・九糎であるので、その二十三行分となると四三・七糎となり、種々の誤差はあろうが、第三紙目が原形に近いものであったといえる。

したがって、海龍王寺本α群の隅寺心經の奈良時代の状況は、紙高約二六・五糎、紙幅約四三・七糎の料紙を二十紙程度に成巻し、界線で二十三行に区画された写経料紙が用意され、写経

生たちは功德文Bをもつ字配りa群の本経によって、冒頭一行、末尾二行の空行を置いて、首題一行、本文十六行、功德文三行を書写したものと考えられる。

なお功德文の有無について、例えば、複数部を成巻した巻尾など節目となる箇所¹⁰にそれを配した可能性も考えられるが、それを検討するには遺品例が多いとはいえず、少なくとも海龍王寺本では第二紙と第三紙はいずれも功德文をもちながら、その紙継ぎ目は原装であるので、ひとまず功德文の有無の意義については、今後の課題としたい。

次にβ群であるが、上述のように第四紙から第十紙までの紙継ぎ目は原装を示している。このうち最初の第四紙は冒頭に二行弱の空行があり、次いで首題一行、本文十六行が写され、末尾に三行の空行を有している。最後の第十紙は冒頭に三行の空行ののち、第二紙同様に首題一行、本文十六行が写され、末尾に二行弱の空行を有している。第四紙右端および第十紙左端はのち切断等の改変が加わっている可能性があるため、そのあり方は参考にとどまるが、第四紙から第十紙の紙継ぎ目は原装であるため、特に第五紙から第九紙は本来の姿を示しているといえる。

第五紙から第九紙までは冒頭に二行の空行があり、次いで首題一行、本文十六行が写され、末尾に三行の空行を有している。ここでは一紙二十二行であった。第四紙は冒頭に二行弱、末尾に三行の空行をもつことから、右端はのちの改変とみて、第五紙以下と同一のグループであったといえよう。第十紙については、冒頭三行、末尾二行弱と行取りが異なっている。しかし、同筆であることなどから、字配りの軽微な相違と同様に、行取りの軽微な相違として、やはり一連のものとみておきたいが、詳細は今後の課題としたい。

したがって、β群のうち第十紙を除いて一紙の料紙は、冒頭に二行の空行をもち、次いで首題一行、本文十六行が写され、末尾に三行の空行をもつものが原形であったと考えられる。また一紙の行数は二十二行であったといえる。

法量について紙高は、α群同様に現状の二六・五糎をひとまず原形と考えることにしたい。紙幅については、上述のようにほぼ四二・〇糎であるので、これが原形であったといえよう。

したがって、海龍王寺本β群の隅寺心経の奈良時代の状況は、紙高約二六・五糎、紙幅約四二・〇糎の料紙を二十紙程度に成巻し、界線で二十二行に区画された写経料紙が用意され、写経生たちは功德文をもたない字配りb群の本経によって、冒頭に二行、末尾三行の空行を置いて、首題一行、本文十六行を書写したものと考えられる。

なお第四紙本文十四行目冒頭の「能除一切苦真实」は擦り消したのちに筆写したもので、その擦り消しの痕跡を熟視すると、「呪即説呪曰」が読み取れ、脱行したことに気づいて修正したものと思われる。これは本経を見ながらその通りに筆写していたことを示す痕跡といえよう。

二 根津美術館本について

根津美術館本は十四部を成巻するもので、伝存する隅寺心経のなかでもっとも長く、重要美術品に指定されている。田中光顕（一八四三～一九三九）の旧蔵にかかり、大正八年（一九一九）に購入されたものである。料紙はおおむね淡褐色を呈している。法量については、紙高は二六・三糎～二六・五糎、紙幅は四〇・一糎～四五・七糎となっている。

接続状況は、紙継ぎ目における天界や地界の食い違いを基準に判断すると、第一紙と第二紙、第三紙と第四紙、第四紙と第五紙、第五紙と第六紙がそれぞれ界線が通っていない。一方、第六紙から第十四紙までは紙継ぎ目を超えて界線が引かれた痕跡がある。これらはほぼいづれの紙継ぎ目とも天界、地界とも糊付け間際で一旦途切れ、そのやや上から次の料紙にかけて、右から左に一気に引かれている。場合によっては、前の界線が次の料紙にまで及ぶ例もある¹¹。したがって、第六紙から第十四紙までは原装であったことがわかる。つまり接続関係からすると、第一紙、第二紙と第三紙、第四紙、第五紙、第六紙から第十四紙の五つのグループにわかれることになる。

本経についてみるなら、経題では、第一紙は首題「佛説摩訶般若波羅蜜多心経」のみ、第二紙から第十三紙は首題「心経」のみ、第十四紙は首題「心経」に尾題「摩訶般若波羅蜜多心経」と三つのグループにわかれる。

字配りについてみると、全十四紙ともa群に属すが、第二紙から第十四紙までがもつとも準的なa0群であるのに対して、第一紙は本文第十一行から第十五行はa6群なっており、二つのグループにわかれる。

用字についてみると、ニ「无」とへ「已」とヌ「薩」の用字とハ「復」の書体で相違がみられ、第四紙から第十四紙は「无」「已」「薩」と行書体「復」とするのに対して、第一紙は「無」「以」「沙」と楷書体「復」と四点で、第二紙と第三紙は「无」「以」「薩」と楷書体「復」と二点でそれぞれ異なり、三つのグループにわかれる。

経題の相違については後述するとして、接続関係を重視し、原装を示す第二紙と第三紙、第六紙から第十四紙についてみると、字配り、用字とも同一であり、筆跡では少なくとも第六紙から第十四紙は同筆に感じられるので、第二紙と第三紙を根津美術館本a群、後者をβ群と呼ぶことにする。ちなみに両者の筆跡は明らかに異筆で、本経も異なっていたと考えられる。つまり異なる写経生が異なる本経によって書写したということである。なお第四紙と第五紙の紙継ぎ目は連続しないものの、筆跡が似通っているので同筆の可能性がある。

根津美術館本のあり方を上述のように理解した上で、以下、根津美術館本のa群とβ群の奈良時代のあり方について復原を試みたい(表2参照)。

まずa群であるが、原装を示すのは第二紙と第三紙の紙継ぎ目であることから、その点に注目し、本来の姿を考えてみたい。第二紙は冒頭に一行の空行があり、次いで首題一行、本文十六行が写され、末尾に四行の空行を有しており、第三紙もまったく同じ状況を呈している。第二紙右端および第三紙左端はのちの改変の可能性もあるが、いづれも原装である第二紙と第三紙の紙継ぎ目前後の空行の状況と一致するもので、これらもほぼ本来の姿を示しているといえよう。つまり根津美術館本a群の一紙の料紙は、冒頭に一行の空行をもち、次いで首題一行、本文十六行が写され、末尾に四行の空行をもつものが原形であったと想定される。また一紙の行数は二十二行であったといえる。

法量について紙高は現状が原形かどうかには判じがたいが、第二紙、第三紙ともに同寸であることから、ひとま

表2 根津美術館本

| 紙数 | 経題 | | 字配り | 用字 | | | | 空行 | | 法量 | | |
|------|--------------|------------|-----|----|---|---|----|-----|-----|------|------|----|
| | 首題 | 尾題 | | 无 | 已 | 薩 | 復 | 冒頭 | 末尾 | 紙高 | 紙幅 | |
| 第1紙 | 佛説摩訶般若波羅蜜多心經 | | a6 | 无 | 以 | 沙 | 楷書 | 1 | 4 | 26.3 | 41.0 | α群 |
| 第2紙 | 心經 | | a0 | 无 | 以 | 薩 | 楷書 | 1 | 4 | 26.3 | 43.0 | |
| 第3紙 | 心經 | | a0 | 无 | 以 | 薩 | 楷書 | 1 | 4 | 26.3 | 43.0 | |
| 第4紙 | 心經 | | a0 | 无 | 已 | 薩 | 行書 | 1 | 2 | 26.3 | 40.4 | |
| 第5紙 | 心經 | | a0 | 无 | 已 | 薩 | 行書 | 0.5 | 3 | 26.4 | 41.0 | |
| 第6紙 | 心經 | | a0 | 无 | 已 | 薩 | 行書 | 1 | 2 | 26.4 | 40.6 | β群 |
| 第7紙 | 心經 | | a0 | 无 | 已 | 薩 | 行書 | 1 | 2 | 26.4 | 40.6 | |
| 第8紙 | 心經 | | a0 | 无 | 已 | 薩 | 行書 | 1 | 2 | 26.4 | 40.4 | |
| 第9紙 | 心經 | | a0 | 无 | 已 | 薩 | 行書 | 1 | 2 | 26.4 | 40.4 | |
| 第10紙 | 心經 | | a0 | 无 | 已 | 薩 | 行書 | 1 | 2 | 26.4 | 40.4 | |
| 第11紙 | 心經 | | a0 | 无 | 已 | 薩 | 行書 | 1 | 2 | 26.4 | 40.2 | |
| 第12紙 | 心經 | | a0 | 无 | 已 | 薩 | 行書 | 1 | 2 | 26.4 | 40.3 | |
| 第13紙 | 心經 | | a0 | 无 | 已 | 薩 | 行書 | 1 | 2 | 26.4 | 40.1 | |
| 第14紙 | 心經 | 摩訶般若波羅蜜多心經 | a0 | 无 | 已 | 薩 | 行書 | 1 | 2.5 | 26.5 | 45.7 | |

※紙数巻の点線は原装、実線はのちの紙継ぎ目を示す。

ず原形と考えることにしたい。紙幅についても両者が同寸であることから同じく原形と考えておく。したがって、根津美術館本α群の隅寺心經の奈良時代の状況は、紙高約二六・三糎、紙幅約四三・〇糎の料紙を二十紙程度に成巻し、界線で二十二行に区画された写経料紙が用意され、写経生たちは功德文をもたない字配りa0群の本經によって、冒頭一行、末尾四行の空行を置いて、首題一行、本文十六行を書写したものと考えられる。

次にβ群であるが、第六紙から第十四紙までの紙継ぎ目は原装を示している。このうち最初の第六紙は冒頭一行の空行があり、次いで首題一行、本文十六行が写され、末尾に二行の空行を有している。最後の第十四紙は冒頭に一行の空行ののち、首題一行、本文十六行が写され、一行の空行を置いて、尾題「摩訶般若波羅蜜多心經」と記したのち、二行半の空行を有している。第六紙右端および第十四紙左端はのちの改変の可能性もあるが、第七紙から第十三紙の示す紙継ぎ目前後の空行の

状況と相違するものではなく、本来の姿を示しているといえよう。第十四紙については、尾題を伴うことを踏まえて、後述するとして、一旦、第六紙から第十三紙についてみると、 β 群の一紙の料紙は、冒頭に一行の空行をもち、次いで首題一行、本文十六行が写され、末尾に二行の空行をもつのが原形であったと想定され、一紙の行数は二十行であったといえる。

法量について紙高は、現状の二六・四糎を α 群同様にひとまず原形と考えることにしたい。紙幅については、四〇・一糎 \sim 四〇・六糎を呈している。第六紙から第十三紙までの界幅が一・九糎ないし二・〇糎であるので、その二十行分となると三八・〇糎 \sim 四〇・〇糎となり、種々の誤差はあろうが、現状の法量に重きを置くことにすると約四〇・五糎が原形であったと考えられる。

したがって、根津美術館本 β 群の隅寺心経の奈良時代の状況は、紙高約二六・三糎、紙幅約四〇・五糎の料紙が二十紙程度に成巻され、界線で二十行に区画された写経料紙が用意され、写経生は功德文をもたない字配り α 群の本経によって、冒頭に一行、末尾二行の空行を置いて、首題、本文十六行を写したものと考えられる。

さて、第十四紙の理解であるが、第六紙から第十四紙は原装であったことは指摘したとおりで、第六紙から第十三紙までは首題「心経」のみであったが、第十四紙が首題「心経」に加えて尾題「摩訶般若波羅蜜多心経」を有し、第十三紙までと異なっている。これをどのように解釈すればよいであろうか。一つの解釈として、複数部を成巻された中間部分には首題「心経」のみのものを配し、その最終巻末に尾題「摩訶般若波羅蜜多心経」を置いたのではないかと推定するのである。実は第十四紙と同様に首題「心経」と尾題「摩訶般若波羅蜜多心経」もつ遺品は他にもあり、この第十四紙のみが異例ではなく、他に類例が複数存在する可能性がある。そうではあれば、最終巻末に尾題を記すという憶測の傍証となるであろう。また、そう想定するならば、根津美術館本第一紙が首題に「心経」ではなく、「佛説摩訶般若波羅蜜多心経」という具名を伴ったことについても複数部を成巻した巻頭に用いられた可能性が考えられよう。

表3 隅寺心経（年料多心経）の復原

| | 首題 | 字配 | 功德文 | 用字 | | | | | | | | | | 空行 | | 法量 | | | | |
|------------|----|----|-----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|----|----|----|------|------|
| | | | | イ | ロ | ハ | ニ | ホ | ヘ | ト | チ | リ | ヌ | ヲ | ワ | カ | 冒頭 | 末尾 | 紙高 | 紙幅 |
| 海龍王寺本 a 群 | 心経 | a | B | 蘊 | 楷 | 楷 | 无 | 目 | 以 | 呪 | 掲 | 囉 | 沙 | 邪 | 恩 | 問 | 1 | 2 | 26.5 | 43.7 |
| 海龍王寺本 β 群 | 心経 | b | | 蘊 | 楷 | 楷 | 无 | 目 | 以 | 呪 | 掲 | 囉 | 莎 | / | / | / | 2 | 3 | 26.5 | 42.0 |
| 根津美術館本 a 群 | 心経 | a | | 蘊 | 楷 | 楷 | 无 | 目 | 以 | 呪 | 掲 | 囉 | 薩 | / | / | / | 1 | 4 | 26.3 | 43.0 |
| 根津美術館本 β 群 | 心経 | a | | 蘊 | 楷 | 行 | 无 | 目 | 已 | 呪 | 掲 | 囉 | 薩 | / | / | / | 1 | 2 | 26.3 | 40.5 |

また第十四紙の紙幅について、第六紙から第十三紙まで二十行で紙幅約四〇・五糎であったのに対して、第十四紙は現状で二十三行弱、紙幅四九・七糎とずいぶん長いものになっている。この点について最後に言及しておきたい。

正倉院文書によれば、年料多心経をはじめとして写経料紙は一般に二十紙が一巻に成巻されたことからすると、根津美術館本β群で第十四紙の一紙のみがなぜ長さが違うのか、その理由を考える必要がある。これについては、上述のように最終巻末に尾題を記すことが予定されていたとすると、例えば、料紙を成巻する際、中間部分は同寸で、最終紙つまり二十紙目のみ他より長い料紙が用意されたと想像されるのである。

なお根津美術館本の第一紙、第四紙、第五紙がどのような分類になるかは今後の課題としたい。

おわりに

海龍王寺本と根津美術館本という複数部成巻された隅寺心経の遺品の現状を観察することで、本来のあり方つまり奈良時代の姿の復原を試みてきた。その結果、海龍王寺本と根津美術館本で、それぞれα群とβ群の都合四種類の奈良時代の姿を復原することができた（表3参照）。残念ながらそれぞれが何年度の年料多心経かは確定できないが、このような実例を参考にして隅寺心経の遺品を分類、整理することで、その理解はより深まるものと考えられる。特に根津美術館本β群は複数成巻された巻末を示すものとして重要な資料といえよう。

ところで原装の復原にあたって紙継ぎ目の界線の状況を根拠に示してきたが、すでに触れたように天平十八年料のよ
うに一紙づつ書写、成卷した場合、紙継ぎ目における界線の食い違いなど界線の状況をもって原装かどうか判断する根
拠とならないことになるが、それ以外でも同様な事例つまり原装であっても紙継ぎ目で天界ないしは地界が食い違う可
能性があったことを最後に述べておきたい。

一年料多心經の天平二十一年料の装丁は、一紙に一巻づつ写し、三十紙(三十部)を一巻とし、総計二十六巻に仕立てた
もので、その内訳は、三十紙(三十部)を成卷したものが二十五巻と、十八紙(十八部)を成卷したものが一巻であった。¹⁴
写經にあたって二十紙を一巻にした料紙が充てられたが、上述の状態に仕上げるには、書写後に紙継ぎをする必要があ
るのである。天平二十一年料の場合、装潢による料紙の製作は、七百八十紙を二十紙づつ三十九巻とされたことがわか
っており、書写にあたっては、二十紙一巻の単位で三十八巻が充てられ、残りの一巻は適宜切断され、四紙と八紙とで
支給されている。具体的には、天平二十年十月八日から十九日にかけて、達沙牛甘には百二十紙、成卷したものと
は六巻が、志紀久比万呂には百二十紙、成卷したものとしては六巻が、建部広足は百二十紙、成卷したものとして六
巻が、万昆君万呂には百二十紙、成卷したものとしては六巻と端数四紙が、錦部大名には百四十八紙、成卷したものと
して七巻と端数八紙が、大鳥祖足には百四十紙、成卷したものの七巻がそれぞれ支給されている。これらのうち端数の料
紙が十月十七日・十九日と最終段階で充てられているので、錦部大名へ支給された八紙は、十八巻(十八紙)を成卷した
最終巻の部分を書写したためと思われる。十九日に建部広足へ支給された四紙は、二紙が破で正用は二紙であるが、そ
の用途は不明である。完成の仕上がりするには、二十紙一巻と、二十紙一巻を分卷した十紙一巻が必要で、おそらく
二十紙三十八巻中十三巻が分卷され、二十紙二十五巻と十紙二十六巻が用意され、二十紙二十五巻にそれぞれ十紙二十
五巻を継いで成卷し、三十紙二十五巻と、残った十紙一巻に端数八紙で十八紙一巻の合計二十六巻にされたと考えられ
る。したがって、仕上げられた各巻一箇所には書写後の紙継ぎ目が生じることになる。つまり原装でありながらも界線

の食い違いが生じることがあることになる。そうならば、界線の食い違いのある紙継ぎ目について、それが本来の紙継ぎか、後世の紙継ぎかを慎重に判断しなければならない。ただし紙継ぎのほとんどは界線の食い違いなどで原装を見極めることができるともいえよう。

以上、さまざまな課題を確認しながら、隅寺心経の奈良時代の姿をさらに抽出していくとともに、筆跡の問題も含めてさらに検討を深めていきたいと思う。

註

- 1 宮崎健司「年料多心経について」(『仏教史学研究』三十五卷二号、一九九二年、のち『日本古代の写経と社会』所収、塙書房、二〇〇六年)。
- 2 宮崎健司「正倉院文書と古写経―隅寺心経の基礎的観察」(新川登亀男編『仏教文明の転回と表現 文字・言語・造形と思想』所収、勉誠出版、二〇一五年)。以下、年料多心経および隅寺心経に関する記述は、特に断らない限り、註(1)前掲論文および本論文による。
- 3 海龍王寺本は奈良国立博物館に寄託されている。
- 4 『棟堂日歴』文政十二年七月十五日条。
- 5 隅寺心経の経題については、左記のような種類がみられる。
 - ①「佛説摩訶般若波羅蜜多心経」(首題・尾題とも)
 - ②「佛説摩訶般若波羅蜜多心経」(首題のみ)
 - ③「摩訶般若波羅蜜多心経」(首題のみ)
 - ④「心経」(首題のみ)
 - ⑤「心経」(首題)と「佛説般若波羅蜜多心経」(尾題)
 - ⑥「心経」(首題)と「摩訶般若波羅蜜多心経」(尾題)
- 6 隅寺心経には、功德文を有するものと有しないものに大別でき、功德文を有するものも左記のようにA・Bの二種類がある。

A 誦此經破十惡五逆九十五種邪道若欲供

養十方諸佛報十方諸佛恩當誦觀世音般

若百遍千遍无問晝夜常誦此經

B 誦此經破十惡五逆九十五種邪道若欲供養

十方諸佛報十方諸佛恩(思)當誦觀世音般若

百遍千遍无問晝夜常誦无願不果

7 管見の限りでは、本文の主な用字の相違は、二行目のイ「蘊」・「蓋」、三行目以下のロ「亦」の楷書・草書(四ヶ所)、ハ「復」の偏の楷書・行書、五行目以下のニ「无」・「無」・混用(二十一ヶ所)、七行目のホ「明」・「明」、八行目のヘ「已」・「以」、十三行目のト「咒」・「呪」(六ヶ所)、十六行目のチ「掲」・「羯」、リ「羅」・「囉」、ヌ「薩」・「莎」・「莎女」・「娑」・「沙」の十種類がある。功德文をもつものでは、その用字の相違には、一行目のヲ「邪」・「耶」、二行目のワ「恩」・「回心」・「思」、三行目のカ「問」・「問」の三種類がある。

8 内題・外題を除いて、本文十六行のうち半分以上の九行までが共通した字配りをもつものをa群とし、a群に比して、九行以前から異動がみられるものをb群とする。伝存する遺品としてはa群がボビユラーなものである。なお詳細にみれば、a・b両群ともさらに分類できる。a群のもつとも典型的なa0群の字配りを次にしめす。

00 心經

01 觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五

蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不

異色色即是空空即是色受想行識亦復如

是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨

不增不減是故空中无色无受想行識无眼

耳鼻舌身意无色香味觸法无眼界乃至

无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死

亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得已无

所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心无

- 10 罽礙无罽礙故无有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
- 11 得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
- 12 多是大神咒是大明咒是无上咒是无等等咒能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜
- 13 多咒即說咒曰
- 14 揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提薩婆訶
- 15 年料多心經では、天平二十一年料では、料紙二十紙が一卷に成巻されて写経生に充てられた。
- 16 管見の限りで、功德文Aをもつ遺品は、唐招提寺（二部）、東京国立博物館、京都国立博物館（二部）、静嘉堂文庫美術館、根津美術館、書道博物館、米国・プリンストン大学美術館に、功德文Bをもつ遺品は静嘉堂文庫美術館にそれぞれ所蔵されている。
- 11 第十三紙と第十四紙の紙継ぎ目。
- 12 用字等のニ・ヘ・ヌ・ハは、註（7）の記号に対応する。
- 13 例えば、東北大学附属図書館に所蔵される隅寺心経があげられる。本品は、紙高二五・九糎、紙幅四八・九糎の卷子装で、字配りはa0群に分類される。冒頭一行弱の空行ののち、首題一行、本文十六行を写し、空行一行ののち尾題を記し、末尾に六行半の空行を有している。
- 14 天平二十一年は閏五月を含む年間十三箇月、三百八十四日であったため、年料多心経ではそれを二倍した七百六十八部が書写され、三十紙（三十部）を成巻した二十五巻と、十八紙（十八部）を成巻した一卷で総計二十六巻であったが、通常は年間十二箇月、三百五十五日であるので、年料多心経ではそれを二倍した七百十部を書写し、三十紙（三十部）を成巻した二十三巻と、二十紙（二十部）を成巻した一卷で総計二十四巻であったと思われる。ちなみに天平十八年も閏九月を含め年間十三箇月、三百八十四日間、天平二十一年料と同数であった。

付記 海龍王寺本および根津美術館本の調査にあたって、石川重元氏（海龍王寺）、野尻忠氏（奈良国立博物館）、松原茂氏（根津美術館）には、格別のご配慮とご教示を賜った。記して深謝します。

